アドバンスト マテリアル ジャパン 株式会社
ADVANCED MATERIAL JAPAN CORPORATION
AMJ

日本経済新聞　2007年（平成19年）5月8日（火曜日）

激化するレアメタル争奪

マーケット潮流・底流

中国の資源保護に不安

「レアメタル（希少金属）を買いたいが、取引できるか？」。大手商社のもとに海外のファンドからこんな国際電話が頻繁にかかってくるようになった。

レアメタルと総称される金属類は、その名の通り生産量が少なく、生産国も偏在している一方、情報技術（IT）産業などの需要が拡大している。「産業のビタミン」がかつてのキャッチフレーズだったが、いまや重要度がさらに増し「産業の必須アミノ酸」。投資対象としても目を付けられるようになった。

ただでさえ需給の逼迫（ひっぱく）感が強いのに、投機の要素も加わって値上がりが目立っている。

例えばルテニウムというプラチナ（白金）族の貴金属がある。伝統的な需要は、カセイソーダを造る際の電気分解用の電極という地味なもので、価格も安定していた。しかしハードディスクを生産する際のターゲット材としての需要が伸び、昨年一年間で一グラム（三十一・一グラム）二〇〇ドル前後から八〇〇ドルにほぼ四倍になった。

▼レアメタル　資源量が少なく、技術的経済的に抽出が困難な金属という意味で使われる一種の和製英語で、厳密な定義はない。日本ではレアアース（十五種）を一鉱種とし計三十一種をレアメタルとしている。経済産業省はコバルト、バナジウムなど七鉱種を国家備蓄の対象としているが、備蓄政策の見直しなどを総合資源エネルギー調査会で審議中。

液晶パネルに使うインジウムは、二〇〇三年末に一キロ三〇〇ドル強だったのが、〇五年末には八〇〇ドルを超えた。〇六年末にはやや下がったものの依然七〇〇ドル強。ルテニウムはプラチナの、インジウムは亜鉛のそれぞれ副産物で、本体の金属も品薄で高騰している。この三年ほどの間に二、三倍になったレアメタルはこのほかにも数多い。

鉱種によって生産国は異なるが、ロシアや中央アジアなどの旧ソ連、中国、アフリカなどで、供給の安定性に不安をぬぐえない。なかでも日本の需要業界の不安をかき立てているのは、近年目立つ中国の資源ナショナリズムである。

中国は昨年制定した五カ年計画（〇六―一〇年）でレアメタルの資源保護強化などを打ち出した。これに沿ってレアアース（希土類）やタングステン、モリブデン、インジウムなどの輸出税や輸出許可制度などの新たな貿易抑制策を矢継ぎ早に実施している。

中国は銅をはじめ主要なベースメタルでは輸入国に転じている。供給シェアの高い自国のレアメタル資源を切り札とする戦略とみられる。この影響をもろに受けるのは、中国に供給の多くを依存している日本だ。

「この輸出抑制策でタングステン、レアアース、インジウムなどは一〇％方絞られている」（専門商社、アドバンスト・マテリアル・ジャパンの中村繁夫社長）といわれる。

「二十世紀はエネルギーの世紀だったが、二十一世紀はレアメタルの世紀」。中村社長は最近欧州で開かれたレアメタルの国際会議でこんな説を聞いたという。レアメタルの世紀は大げさにしても、デジタル革命に欠かせないレアメタルは、日本の産業にとってキーとなる素材である。

今後、争奪戦が激しくなると見込まれる中で、官民ともようやく安定確保策を模索し始めた段階に過ぎない。

（編集委員　林邦正）

日本のレアメタル消費動向

金属名	消費量（トン）	シェア	輸入先トップ
プラチナ	41	19.6	南アフリカ(81)
ニッケル	17.5万	14.1	インドネシア(44)
タングステン	0.8万	13.6	中国(79)
コバルト	1.3万	25.8	フィンランド(30)
モリブデン	2.9万	17	チリ(45)
バナジウム	1万	11.4	南アフリカ(49)
インジウム	211	60.1	中国(70)
レアアース	2万	23.8	中国(90)

（注）経済産業省調べ、消費量はインジウムが2002年、レアアースが03年、その他が05年、シェアは世界に占める割合、輸入先のカッコ内は輸入量全体に占める割合、％